

## 變文資料を中心とする中國口語史研究再検討\*

玄幸子

中國語口語研究に関しては翟灝『通俗編』、錢大昕『恆言錄』、羅振玉『俗說』さらに劉淇『助辭辨略』などの先駆けともいえる先達の研究成果はあるものの、本格的に口語を対象とする研究成果が表れるのは1900年代半ばといえよう。敦煌文獻の発見からほぼ半世紀を経てようやくその成果がまとまった形で表れ始めた時期である。その契機となったのは、口語の寶庫ともいえる俗文學を集大成した『敦煌變文集』（1957年人民文學）の出版であることは誰もが認めるところである。さらに2年後の1959年には初めての口語語彙辭書ともいえる蔣禮鴻『敦煌變文字義通釋』が世に出た。

日本においても時を同じくして太田辰夫『中國語歴史文法』（1958年、江南書院）が出版されたが、51種の敦煌寫本中から101の例文を取り上げている<sup>1</sup>ことから、敦煌文獻の口語研究に占める位置が如何に大きかったかを知りうる。また、『敦煌變文集』の出版を受けて入矢義高「敦煌變文集口語語彙索引」（1961油印）が編まれ、未詳語彙7項目を含む1210項目を口語語彙として取り上げている。さらに蔣禮鴻『敦煌變文字義通釋』が出版されるや、ほとんど時を移さず「書評：蔣禮鴻《敦煌變文字義通釋》」<sup>2</sup>を公表するなど、口語研究が當時如何に熱く展開されたかがうかがい知れる。

その後、史料の整理と公開が進むにつれ敦煌文獻全體の研究が急速に深化し現在に至っているが、變文研究に限って言えば、中國では『敦煌變文集』の改訂版ともいえる『敦煌變文集新書』『敦煌變文選注』『敦煌變文校注』『敦煌變文選注（増訂本）』が次々に出版された。一方、日本では各地域で輪讀會などが開催されながらも、まとまった形で公開されることはなく、個別の事項について個々人の研究

\*本稿は敦煌學國際學術研討會・京都2015における研究發表“中國口語史再探討——以敦煌變文爲中心”を軸に再整理したものである。研究發表及び本稿はまた日本學術振興會科學研究費基盤研究（A）「中國典籍日本古寫本の研究」（課題番號：25244014，代表：高田時雄京都大學名譽教授）の助成による成果の一部である。

<sup>1</sup>玄幸子，敦煌文獻與中國口語史研究——以太田辰夫《中國語歴史文法》爲中心，《敦煌吐魯番研究》第十四卷（2014），537-552頁參照。

<sup>2</sup>入矢義高著，京都大學『中國文學報』第11冊，1959年，175-180頁。

の中で深められていったという點に中國との大きな差が見られる。

口語研究に關しては現在までに文字、音韻、語法の面で多くの研究成果が蓄積されてきている。その概要についてはまた紙面を改めることにするが、小稿では従來の研究手法を振り返り、いささかの問題點を取り上げることで今後の研究法に對する新たな取り組みを提起する。

一例として蔣禮鴻『敦煌變文字義通釋』の初版から取り上げられてきた「灘」の扱いについて考察する。まず、初版『敦煌變文字義通釋』の記載を確認すると、

灘

完，盡。

破魔變文：“鬼神類，萬千般，變化如來氣力灘。任你前頭，多變化，如來不動一毛端。”（頁349）“氣力灘”就是氣力盡。案，《一切經音義》卷二十引《爾雅》釋天“涿灘”的李巡注道：“灘，單，盡也。”“單”通作“殫”，“殫”也是盡。說文“灘”是“灑”的俗體，“灑，水濡而乾也。”又引詩“灑其乾矣”。水乾就是水盡，水盡叫做灘，力盡也叫做灘<sup>3</sup>。

上記初版では「灘」に「完（おわる），盡（つきる）」の意味を認め、破魔變文の用例を挙げて「もろもろの鬼神は幾萬にも様々に如來に變化するも、氣力が盡きる。いかな多く變化するも、如來は微動だにせず。」と解釋している。傍證として『一切經音義』卷二十に引く『爾雅』釋天の「涿灘」につけられた李巡の注を挙げる。「灘は單，盡なり」から、「單」と通用する「殫」に「盡」の意味があることで、「灘」に「盡」の意味が認められると檢證する。さらに『說文解字』に見える「灑」字の俗體字としての「灘」について、本字の「灑」が「水に濡れたのが乾く」の意味であることから「乾く」のは「水が盡きる」ことだとし「力が盡きる」ことも同様だと解釋する。

このように A = B、B = C、…と置き換えて解釋するのは典型的な訓詁學の手法であり、さらにその語源を追求するのもまた特徴的ではあるが、時に論の展開に強硬な姿勢が感じられるのは如何ともしがたい。

續いて増訂本での變更部分を確認してみよう。

灘

完，盡。

破魔變文：“鬼神類，萬千般，變化如來氣力灘。任你前頭多變化，如來不動一毛端。”（頁349）“氣力灘”就是氣力盡。這是說鬼神向如來施展變化，不能動如來一毛，而自己氣力已盡。案，玄應《一切經音義》卷十七，俱舍

<sup>3</sup>『敦煌變文字義通釋』1959, 44 頁。

論第一卷音義引《爾雅》釋天“涸灘”的李巡注道：“灘，單，盡也。”“單”通作“殫”，“殫”也是盡。說文“灘”是“灘”的俗體，“灘，水濡而乾也。”又引詩“灘其乾矣”。水乾就是水盡，水盡叫做灘，力盡也叫做灘。

徐復說：尊說只推究語源，未說本字。按：《廣韻》二十五寒，“攤”與“疹”同音，正謂力極，他于切。<sup>4</sup>。

第3版で増加した部分に下線部を付した。とりわけ「破魔變文」例文について「これは、鬼神が如來に對して變化を展開するが如來の一毛をも動かすことができず、自分の氣力がすでに盡きてしまったことをいっている」という解釋が付け加えられている。これは、入矢書評<sup>5</sup>にみられる「如來の氣力が盡きる」と解釋した批判を考慮してのことと推測される。参考までに書評の該當箇所を以下に引用しておく。

しかし一方では、氏のいわゆる「歸納整理」が甚だしい牽強と臆斷に陥った例も、また少なくはない。その第一は、先秦や漢代の古書を手がかるに引用して、こじつける場合である。……例えば、第一の「灘」の例文は、「鬼神類，萬千般，變化如來氣力灘」（破魔變文）であるが、そもそも原文がこれでは通じない。ここは前後の文脈からすると、如來の氣力が「灘」するのではなく、外道の鬼神たちが如來の法力に敗れて「氣力灘」となったことでなくてはならない。主客は全く正反對なのである。そこを讀み誤ったままで「灘」を「盡」の意と附會しても、全く無意味である。右の句は、乙卷（S3491）では「變化神通氣力難」となっている。これならば、問題なく文意は通ずる（變文集はこの乙卷の異同を擧げていない）。したがって「灘」は甲卷（P2187）の誤寫であることは疑ない。（176-177頁）

次に第4版の増加部分を確認してみよう。ほぼ變化のない前半は省略し増加部分を中心に引用する。

灘

完，盡。

（前半省略）

<sup>4</sup>『敦煌變文字義通釋』1961, 105-106頁。

<sup>5</sup>前掲注3参照。なお、この箇所の評者の最終的判斷は『佛教文學集』（平凡社1975）所收の「破魔變文」當該箇所に附せられた注7にみえる。引用すると「その變化の神通は力續かず。『變文集』では、ペリオ二一八七號の「變化如來氣力灘」を本文とするが、これでは意味不通。ここではスタン三四九一（紙背）の「變化神通氣力難」に従う。」（24頁）。

徐復說:以上只推究語源,未說本字。“氣力盡”另有專字作“瘳”,《說文》疒部:“瘳,勞病也。”又作“瘳”。《廣韻》上平聲二十五寒:“瘳,力極,他干切。”與“灘”同音。“力極”就是“倦極”,都是說的“氣力盡”《呂氏春秋》重己篇:“使烏獲疾引牛尾,尾絕力勳,而牛不可行,逆也。”高誘注:“勳,讀曰單,單,盡也。”音義亦同。禮鴻按:《集韻》上平聲二十五寒韻,多寒切下有“瘳,勞病也。”“勳,力竭也。”用音切和義訓來推求,“勳”也就是“瘳”字。

郭在貽說:皮日休上眞觀詩:“灑漉風聲癡,跢跢地力瘳。”“瘳”即“灘”之本字。白居易琵琶行:“幽咽泉流水(當作“冰”)下灘。”“灘”字承幽咽,當亦氣力盡之意,段玉裁改爲“難”字,失考。禮鴻案:唐玄度《新加九經字樣》:“瘳,音灘<sup>6</sup>,馬病也。今《詩》作嘽。”綜徐、郭兩君之說,“氣力灘”的灘字本字當作“瘳”、“瘳”、“勳”,是爲力盡;“幽咽泉流冰下灘”的灘字即《說文》的灘字,是爲水盡。兩者義類相同而字源非一。琵琶行的“水下灘”,日本那波道圓本作“冰下灘”。歐陽修李留後家聞箏詩:“絃蠻巧囀花間舌,嗚咽交流冰下泉。”可證冰字爲是<sup>7</sup>。

第4版では、先に少し触れられていた徐復の本字探求に関する考察を引用、さらに郭在貽の説にも言及している。徐復が『說文』『廣韻』『呂氏春秋』の記載に基づいて「瘳」「瘳」「勳」に本字を求めたのに對し、さらに『集韻』を傍證に引き、郭在貽が皮日休の「上眞觀詩」から「瘳」に本字を求め、白居易の「琵琶行」の「灘」を「難」と改めたのは誤りであるとしたのに對しては『新加九經字樣』を傍證に引きその正當性を跡づけている。さらに兩者の説を總じて、「灘」の本字を「瘳」「瘳」「勳」とし、「力が盡きる」ことであると結論をくだしている。この項目に関しては1981年の増訂版以降改訂は見られない。81年の段階でほぼ解釋が定着したということであろう。これ以降、「破魔變文」該當箇所はほぼ例外なくこの解釋に従っている<sup>8</sup>。

さらに、『漢語大詞典』〈灘〉の項では次に引用するように第4番目に「盡」という字義を認めている。

<sup>6</sup>基づいた版本が確認できないが、『後知不足齋叢書』第二函所收の『新加九經字樣』ほか諸版本「灘」に作る。「灘」「灘」は同音。

<sup>7</sup>『敦煌變文字義通釋』1981, 207-208頁。

<sup>8</sup>參考に近年の成果として『敦煌變文校注』と『敦煌變文選注(増訂本)』の該當箇所に対する注を引用する。まず校注本では本文を「鬼神類,萬千般,變化神通氣力灘」とした上で、注[139]:神通,原録作「如來」。按:「如來」二字蓋涉次行之字而誤,此據乙卷改爲「神通」;注[140]:蔣禮鴻云:「氣力灘」就是氣力盡。……と注を附している。次に選注本では本文は原件のままにおき、注[23]:灘:氣力用盡,通作「瘳」。《廣韻》…と注を付けている。いずれも、「灘」字に關しては蔣禮鴻説を踏襲しているといえる。

灘 tān ㄊㄢ ㄊㄢˋ 〔《廣韻》他乾切，平寒，透。〕

4. 氣力盡。

《敦煌變文集・破魔變文》：“鬼神類，萬千般，變化如來氣力灘，任你前頭多變化，如來不動一毛端。”參閱蔣禮鴻《敦煌變文字義通釋》。

さて、このような解釋は妥當であろうか。變文テキストの校訂の方法と口語を扱う基本的な方針を考察するうえで重要な事例だと考え、以下に検討する。

『敦煌變文字義通釋』の内容を改定版ごとに再度順を追って確認していくと、まず解釋の基本となったのは『一切經音義』卷二十に引く『爾雅』李巡注に則ったということ、61年版で「破魔變文」該當箇所解釋が加えられた以外は、もっぱら本字に関する考察が加えられている。

ではまず、『爾雅』李巡注から見ていくことにする。確かに李巡注に関しては引用の通りではあるが、『爾雅義疏』〈釋天〉「歲陽」の郝懿行疏では上掲の『一切經音義』中の李巡の注を選録したあとに續けて孫炎など諸説を紹介した後、「按涪灘雙聲兼疊韻。諸家各以意說釋文。灘本或作攤。漢孔廟禮器碑作涪歎」という按語を最後に附している。つまり「涪灘」は雙聲疊韻の語であり、諸家は自身の意のままに解釋をしている。「灘」については「攤」と書くものあり、漢孔廟禮器碑では「涪歎」と刻されている。「灘」「攤」「歎」の表記は字義ではなく字音を表したものと考えられる。さらに、この李巡注以外に「灘＝盡」の註を管見のかぎり見つけることができない。これは、この注がかなり特殊だということを物語っている。

次に関連の字について、特に重要だと思われる「殫」と「單」の字義を『漢語大詞典』から引用する：

殫 dān ㄉㄢ ㄉㄢˋ 〔《廣韻》都寒切，平寒，端。〕亦作“揮”。

1. 盡，竭盡。

唐・王昌齡《代扶風主人答》詩：“老馬思伏櫪，長鳴力已殫。”

3. 通“瘡”。病；禍。

《淮南子・覽冥訓》：“斬艾百姓，殫盡大半。”高誘註：“殫，病也。”

單I dān ㄉㄢ ㄉㄢˋ 〔《廣韻》都寒切，平寒，端。〕

16. 通“殫”。盡，竭盡。

《莊子・列禦寇》：“朱泝漫學屠龍於支離益，單千金之家，三年技成而無所用其巧。”

17. 通“殫”。全部。

《禮記・郊特牲》：“唯爲社事，單出里。”孔穎達疏：“單，盡也。”

さらにそれぞれ上記の意味の「殫」、「單」を語構成要素とする語彙が、

殫盡 / 殫極 / 殫竭 // 殫弊 / 殫弱 / 殫微  
 單寡 / 單少 / 單薄 (寡少)  
 單盡 / 單極 / 單竭 單用 (用盡) / 單耗 (耗損至極)  
 單弱 / 單微 / 單斃 / 單薄 (力量薄弱, 不充實)  
 單憂極瘁

と多く認められる。これは「灘」に關して「盡」義を有する構成要素をもつ語彙を一つとして見いだせないのと對照的である。

「灘=盡」の註を他に見いだせないこと、「盡」義を有する構成要素「灘」を含む語彙が無いこと、以上の2つの觀點から「灘」の字義として「盡」の意味を認めるのは難しいと思われる。

次に本字を「瘡」、「疹」、「勳」とする點であるが、なぜ本字が3種類もあるのか、もっと簡単な整理法はないのであろうか。口語を口語と判断する基準の一つに語音を軸とする考え方がある。そこで今回特に語音を真ん中に据えて従来とは異なるアプローチを提示してみたい。

そこでまず「灘」「疹」「單」「殫」について『十韻彙編』から該當箇所を以下に抜き出す。

【切三】

廿四 寒

單 都寒反, 又滯演反, 市連反, 六 (禪) … (鄆) … (丹) … 殫 盡 (簞) …

嘽 馬鳴, 他單反, 六 (嘆) (攤) … 灘 水灘, 一曰歲在申曰滔灘 (誼) … 疹 力極, 又馬病, 託何反

【王一】

單 都寒反, 隻, 又滯演反, 人姓, 九 (禪) … (鄆) … (丹) … 殫 盡 (簞) ……

嘽 他單反, 馬鳴, 八 (嘆) … (攤) … 灘 水灘, 一曰歲在申曰滔灘 (誼) … 疹 力極, 又馬病, 託何反 ……

この4字の韻母はすべて「寒」韻に屬するが、聲母は「端」母「透」母の別がある。高田時雄著『敦煌資料による中國語史の研究』(1988、東京：創文社)では體系的には「端」母「透」母の對立を結論付けているものの、藏漢對應資料に見える「端」母の注音“th”と「透」母の注音“t”や「開蒙要訓」の「端」「透」母通用例があることが報告されており<sup>9</sup>、これらから「灘」「疹」「單」「殫」を音通字として捉えることができよう。さらに以下に引く『廣韻』の「疹」字の記述により音通字であることを明確に確認できる。

上平 25 寒韻 (他干切) 力極。

<sup>9</sup>同書 52、65、298 頁の各表参照。

下平 7 歌韻 (託何切) 馬病, 又力極也。又叨丹切。

去聲 38 箇韻 (丁佐切) 病也。

つまり「疹」は大きく透母平聲と端母去聲の2種の字音があるものの、意味上大きく乖離していない状況が見て取れる。また端母去聲箇韻は「瘰」と同音であり、「瘰」にはさらに上平寒韻端母の又音がある。

上述の状況から、次のように考えられる。これら一群のグループは1つの意味範疇(竭盡——力盡・力極——弱薄——〔馬〕病)にまとめることができ、この意味を表す語音が平聲寒韻端(/透)母である。また、この語音を代表させるのに最も適切な字は「單」であるが、「單」は別に大きな意味範疇「孤」を有するため、區別する意味で「殫」を使う。

結論をまとめれば、

一、「平聲寒韻端(/透)母——殫(單)」を口語と判定する理由:

①同音・音通による別字・異文が豊かなバリエーションで確認できる。「灘」はそのバリエーションの一つである。

②また、この意味の「殫(單)」を語構成要素にもつ語彙は下記のごとく多々見られる。

殫盡 / 殫極 / 殫竭 // 殫弊 / 殫弱 / 殫微; 單寡 / 單少 / 單薄 (寡少) // 單盡 / 單極 / 單竭 // 單用 (用盡) / 單耗 (耗損至極) // 單弱 / 單微 / 單斃 / 單薄 (力量薄弱, 不充實) // 單憂極瘁

二、平聲寒韻端(/透)母のこの口語語彙の基本義は「盡」「疲弊、病」である。標準的表記法は「殫(單)」である。一方「灘」を構詞要素とする上記の如き語彙は未見であることから「灘」が表記法として定着していなかったことは明白である。

三、變文集の當該箇所については「破魔變文: “鬼神類, 萬千般, 變化如來氣力灘(殫)。任你前頭多變化, 如來不動一毛端。”」とし、口語語彙「殫(單)」を任意に別の音通字で表記したものと判断する。『爾雅』釋天「涖灘」の李巡注「灘, 單, 盡也。」のみをもって、「灘」に「完, 盡」の意味を解説するのは無理がある。「灘」は音通による書き誤り、もしくは故意の書き換え(修辭効果を狙ったものか、かけことば遊び、當該箇所の譯語で示せば「氣力も干上がり」といったニュアンスを表現するために語音にひっかけて「灘」字を使用した)と考えられる。

最後に語彙項目としての記述方法を提起し例を示せば以下のとおりである。

dan<sup>1</sup>/ tan<sup>1</sup> 平聲寒韻端(/透)母 殫(單) / 疹、灘、攤、歎、瘰  
意味 盡; 疲弊、病

用例 <燕子賦> 燕子單貧，造得一宅。

<破魔變文> 鬼神類，萬千般，變化如來氣力灘（殫）。

さて、一例として「灘」の扱いを問題としたが、口語語彙としての使用例は變文資料において多くは見られない。むしろさらに時代をさかのぼるのではないかと考えられる。そこで、もう一例、變文資料に多出する口語語彙を取り上げてみよう。

「没」は、否定詞としての用法以外に疑問代名詞としての方法がある。『敦煌變文集』中に7例用法が見える。“緣没（何のために、“爲甚麼”）”“緣沒事（何事のために、“爲何事”）”も加えると全7例の用例が確認される。さらに疑問詞の用例からの引伸義と考えられる「このような（這麼、這樣）、あのような（那麼、那樣）」の指示代名詞の用法も確認される。否定詞の用法は今問題としない。疑問代名詞を中心として項目をまとめると以下のようなだろう。

mo<sup>3</sup> 入聲魂韻（/上聲姥韻）明母 沒、莽、磨

意味 ①甚麼、怎麼 ②這麼（那麼），如此

用例 ①<降魔變文>佛是誰家種族？先代有沒家門？

<捉季布傳文>今受困危天地窄，更向何邊投莽人？

<鷲子賦>朕是百鳥主，法令不阿磨。 → 阿沒（；磨；莽）

②<目蓮救母變文>早知到沒艱辛地，悔不生時作福田。

<無常經講經文>只磨貪婪沒盡期，也須支準前程道。 → 只沒（；磨）

……

ここで問題となるのは、當然のことながら語音ということになる。「没」は入聲魂韻に屬し、韻尾は當然 t と考えられるが、高田時雄前掲書 155-6 頁では t 入聲韻尾がチベット文字はじめコータン・ブラーフミー文字、ウイグル文字、ソグド文字の同時代同地域の資料においてすべて -r で寫されていることについて、ペリオ・マスペロ・羅常培は入聲韻尾の消失過程として摩擦音化を想定したのに對して、有坂秀世の「onglide だけの semi-rolled r」とする考え方を支持している。そこで資料對音表（376 頁）でも、臻攝「没」（10-1, 0785）字に切韻音 [mat<sup>4</sup>] を推定しつつ河西音に [m̥bər<sub>4</sub>] を推定している。さらに資料 T（大乘中宗見解）との對音テキストでは、「什沒」のみに出現するという限定つきであるが、[ma] と記述される。これに關連して同書 117 頁では、「例外的な對音に ma 謨（T43.11）があるが、これは疑問詞「甚謨」に用いられており、單獨に字音を寫したものと認めがたい」と記される。以上をまとめると、「没」の入聲消失はある程度進んでいたと判断されること、また、「什沒」「甚謨」の 2 音節語においては「ma」音を認めると



いうことになろう<sup>10</sup>。

「莽」は廣韻上聲 10 姥模韻模補切であるが、同じく模韻に屬す「謨」字の切韻推定音は [mo<sup>3</sup>]、河西音に [ᵐbu<sub>3</sub>] を推定している。また特殊な對音については前述の通りである。以上の考察の結果、「沒」「莽」「磨」の3語はほぼ同音を寫したものと考えてよかろう。ただ、本字を決める決定的根拠は見つからない。いずれも「mo<sup>3</sup> (何)」を記すために使用されただけだと考えられる。

そこで、接頭辭「阿」のついた「阿沒」「阿莽」「阿磨」も同じ語彙を寫した別の表記としてとらえられる。また、「沒」「謨」などは、從來「甚 ma」「什 ma」「只 ma」「熠 ma」の接尾辭であると捉えられてきたが、少なくとも「甚 ma」「什 ma」の疑問詞に関しては、同義結合による二音節語彙であったものの後半が輕聲化したという可能性もでてこよう。

以上2項目のみ検討しただけであるが、從來個別にとらえられていた語彙を語音から同じグループに括る作業は、口語を語音として再現する基礎的な試みであるだけでなく、從來見過ごされてきた諸問題を改めて再検討する契機にもなりうる。

最後に敦煌學國際學術研討會・京都 2015 における研究發表で提示した2項目を以下に再掲しておく。会場では特に方言との關連についてご教示をいただいた。柴劍虹先生、張湧泉先生はじめご意見を頂戴した先生方に紙面を借りて御禮申し上げます。

dai<sup>4</sup>/ (da<sup>4</sup>) 待 / 大

意義 將, 要; 等待, 等候

用例 (將, 要)

〈維摩詰經講經文〉 遂即安排寶蓋, 整頓金冠, 專心而待赴菴園, 愴戀而難別方丈。

〈維摩詰經講經文〉 今朝大(待)欲禮空王, 直爲纏眠(綿)又嘆傷。

(等待)

〈捉季布傳文〉 待伊朱解迴歸日, 口馬行頭賣僕身。

〈舜子變〉 大(待)伊怨(冤)家上倉, 不計是兩個笠子, 四十個笠子也須燒死。

you<sup>2</sup>xi<sup>4</sup> / you<sup>2</sup>xi<sup>3</sup> 游戲 / 由喜

意義 游樂嬉戲; 玩耍

<sup>10</sup>『敦煌變文字義通釋』では『集韻』「沒」の注を傍證にさらに次のように述べる:「集韻上聲三十四果韻:“沒, 母果切, 不知而問曰拾沒。”“拾沒”即“什沒”, “沒”據《集韻》音切同聲, “拾沒”、“什沒”也就是什麼。」

用例 <董永變文> 董仲長年到七歲，街頭由喜（遊戲）道邊旁。

【附記】<破魔變文> “變化如來氣力灘（難）”という S3491 の異文に據る校訂は、白居易 <琵琶行> “幽咽泉流冰下灘（難）”とする校訂とともに、一考の餘地はあろう。ただ今回諸工具書、諸索引ほか調査した結果“氣力難”という搭配を見つけられなかった。よって、“氣力難（彈）”とする結論を得たが、實際變文資料の中ではこの口語語彙の例をほとんど見いだせない。

#### 使用テキスト

- 『敦煌變文集』王重民ほか，北京：人民文學出版社，1957年  
『敦煌變文集新書』潘重規，臺北：文津出版社，1984年  
『敦煌變文選注』項楚，四川：巴蜀書社，1990年  
『敦煌變文校註』黃征、張涌泉校注，北京：中華書局，1997年  
『敦煌變文選注（增訂本）』項楚，北京：中華書局，2006年

#### 引用文献

（中國）

『敦煌變文字義通釋』蔣禮鴻著

初版 北京：中華書局，1959年

第3版 北京：中華書局，1963年

第4版 上海：上海古籍出版社，1981年

第5版 上海：上海古籍出版社，1988年

『十韻彙編』劉復 [ほか] 編著，臺北：學生書局，1973年影印版

（日本）

入矢義高「書評：蔣禮鴻《敦煌變文字義通釋》」，『中國文學報』第11冊，1959年

入矢義高監修『佛教文學集』，東京：平凡社，1975年

高田時雄『敦煌資料による中國語史の研究』，東京：創文社，1988年

(作者は關西大學外國語學部教授)